

担当教員の研究

地域社会の固有性を理解する

私の専門は、都市社会学、観光社会学です。その立場から、(1)地域社会の固有性、(2)地域社会にとっての観光、の二つをテーマに研究を進めてきました。

町の個性は、町並み、街路などのハード、人々の日常生活やお祭り、地域活動、まちづくりなどのソフトの両面から生まれ出されています。私はこれらと共にある人々の當みや想いに惹かれ、それについての社会学的な研究を目指すようになりました。

対象領域も広いので未だ研究途上ですが、幸い魅力的な個性を有する町に出会うことができました。それが、東京都の「谷中・根津・千駄木」地区と、群馬県の桐生市です。私は両地域にお世話になりながら、町並みの保存・活用の実態、祭礼行事、まちづくりの取り組み、生活史などに関する事例研究を進めてきました。このような研究を積み重ね、地域社会の固有性について様々な観点から考察し、理解することが第一の課題です。

地域社会にとっての観光というテーマ

これから地域社会を考える上で、観光というのは重要な方向性一つです。現在の観光現象を正しく理解することは欠かせません。ただし、どのような観光形態が当該地域に適合的なのか、そもそも観光



担当教員の情報

職位
准教授
専門分野
地域社会学、観光社会学
担当科目
社会調査(質的調査)
観光社会学、都市社会学
演習

が最適解なのかどうか、ということはその地域社会のあり様を踏まえて考えていく必要があります。そのためにも、まずは地域社会の固有性の理解が求められます。観光現象は多様な側面を含んでいます。そこで中でも特に、近年の新たな観光行動の発生に興味を持っています。地域社会にとっての観光を考える上で、大規模な投資が必要な観光形態はあまり現実的ではありません。むしろ、小規模であります。むしろ、小規模であります。それでも、その地域にしかない独自の歴史や文化、町並みなどを経験消費することを望むような新たな観光潮流に、今後の可能性の芽があると思います。そのため、このような新たな観光潮流の特性の解明を第二の課題として研究を進めています。

ゼミでは私自身の研究対象地である群馬県桐生市「谷根千」地区を主なフィールドとして、様々な地域活動行事にも参加させて頂きながら、調査研究を進めました。

学生には、調査だけでなく、可能な限り現場でのお手伝いや地域イベントの企画などに取り組んでもらいたいと思っています。多様な人々と接することは、社会性を身につけるきっかけになります。また、文献の知識を現場にぶつけてみれば、新たな問い合わせ生まれます。さらに、現場の方々のパワーにも直接触れてもらいたいのです。

ゼミではこのような地域の活動を基礎に、関連する領域の知見を文献で学びつつ、現場での活動に従事し、その経験を持ち帰り、改めて関連領域、現場についての議論を深めていくという作業を行っていきます。各自の関心に即して、地域社会やまちづくり、観光現象について、社会学的に分析、理解できるようになることがゼミの目標です。

近年、台湾の都市や歴史の研究を始め、ちょくちょく渡台しています。行く度に新たな発見があります。皆さんもぜひ台湾に目を向けてみてください。

ゼミの活動内容



石井清輝研究室



藤田弘夫(1993)

『都市の論理—権力はなぜ都市を必要とするか—』

中公新書

都市の権力論という観点から古今東西の都市を縦横無尽に論じていく本で、読んでいると、まるで世界各地の都市の時間旅行に行っているような楽しい気分になります。



担当教員の研究

観光まちづくりにおける リーダーシップ

私の専門である「観光学」は観光に関する事象をさまざまなアプローチによって捉える学際的学問で、私がおもに用いるアプローチは経営学や心理学です。これらのアプローチを用いて近年は「観光まちづくりにおけるリーダーの発達及びリーダーシップ」について研究してきました。

日本では最近、観光まちづくりがさまざまな地域で進められています。「このまちづくりには必ず」と言って良いほど、リーダーの存在があります。彼らはどのように観光まちづくりのリーダーとなつたのか、彼らが發揮するリーダーシップとはどのようなものか、それはどのような成果をあげるのか、にしても興味があります。「これまでリーダーの視点から研究を進めてきましたが、今後はフォロワー、すなわちリーダーシップの影響を受ける人々の視点から「観光まちづくりにおけるリーダーシップ」を研究していきます。また、リーダー以外が発揮するリーダーシップについても研究していくと考えています。

研究する上で 大切にしていること

私は「その研究の社会的意義は何か」ということを大切にしています。研究という行為自体に、「探求」という面白さがあります。しかしそ

石黒圭(2012)
『この1冊できちんと書ける!
論文・レポートの基本』

日本実業出版社

ゼミナールの指定テキストです。私たちのゼミナールでは、2年生の時にこちらを輪読し、論文を書く準備としています。第1部が「論文の構成」、第2部が「論文の表現」になっており、おさえておきたい論文の作法がわかりやすく網羅されています。



単純なことは複雑に、 複雑なことは単純に

担当教員の情報	
職位	准教授
専門分野	観光学、政策学、観光まちづくり リーダー発達論、リーダーシップ論
担当科目	観光まちづくり論、観光産業論、アーバンツーリズム 演習



ゼミの活動内容

ゼミナールでは、観光まちづくりに科学的かつ実践的にアプローチし、論理的思考力や問題解決力、ひいては「自ら考えて行動する力」を高めます。進行は、テキスト輪読や討論、個人／グループでの研究発表を基本とします。各学年での学びの概要是以下の通りです。

- ① 2年次後期～3年次以降の演習に必要とされる基礎的なスキルを習得します。具体的には論文・レポートの書き方とビジネスマナーの習得に取り組みます。
- ② 3年次：習得してきたスキルを土台に、前期は専門書／論文の輪読やグループ研究の計画立案です。夏休みにグループ研究の一環として地域調査を行い、後期の前半にその結果をまとめて報告書に仕上げます。後期の後半は、各自で研究テーマを検討し、卒業論文の研究計画書を作成します。
- ③ 4年次：前期は、各自の研究計画に基づき、データ収集のための調査計画を立案します。そして、夏休み前後に各自で調査を実施します。後期は、データ分析及び研究進捗報告・討論を繰り返し、卒業論文を完成させます。卒業論文執筆を通して大学での学びを「ラッショアップし、卒業後の活躍につなげます。

担当教員の研究

道の駅の採算性と効率性に関する研究

私の専門の研究領域は交通政策論・公益企業論であり、主に大きく3つのテーマを中心いています。1つは道の駅の採算性と効率性に関する研究です。現在、全国には1193件に上る道の駅が全国に設置されており、道路交通情報の提供はもちろん、観光、防災、教育、医療など地域のあらゆるニーズを支える拠点として大きな役割を果たしています。しかし、近年は施設の老朽化に伴う修繕維持費の高騰や駅間競合により業績が伸び悩む性の両立が求められますが、これを実現するためにはどのような施策が望ましいのかについて定量的・定性的な調査をもとに分析を行っています。

条件不利地域の公共交通と交通インフラの非経済的便益の評価に関する研究

2つ目は、条件不利地域の公共交通とそれを支える空港、港湾、駅などの交通インフラをめぐる非経済的便益とその価値構成の評価に関する研究です。周知のように少子高齢化の進展に伴い、過疎地域や離島をはじめとする条件不利地域の公共交通の経営は厳しさを増しています。しかし、これらの交通は不採算ではあるものの、住民の移動や

学生生活は一生に一度です。
沢山学んでください。

**公共交通の住民参加と
ソーシャルキャピタルの
関係をめぐる研究**

最後は、公共交通の住民参加と条件不利地域の公共交通は苦しい経営を余儀なくされています。そこで、公共交通の企画・運営に参加する住民参加型の公共交通の運行が開始されています。「一方、このような住民の取り組みの原動力になるものとは何か。」ここでは、ソーシャルキャピタルの存在に焦点をあて、ソーシャルキャピタルの醸成が公共交通の住民参加に結びつくのか否かについて理論的・実証的に明らかにすることを目的に研究を行っています。

担当教員の情報	
職位	准教授
専門分野	交通政策論、公益企業論
担当科目	交通政策論、観光交通論 流通経済論、演習



就職活動体験報告会(2020年度)



伊藤羊一(2018)

『1分で話せ：
世界のトップが絶賛した
大事なことだけシンプル
に伝える技術』

SBクリエイティブ

プレゼンや面接等で自分の話を相手に簡潔に分かりやすく伝えるための考え方や方法がわかりやすく書かれています。とくに就活前の学生には必読です。



夏季企業研修
(ANA羽田整備工場:2019年度)

大会や懸賞論文の応募に向け、論文の執筆や報告資料の作成を行います。それ以降は卒論の執筆準備に取り掛かります。

ゼミは学生の自主性を尊重し、「全力で勉強し、全力で遊びをモットーに明るく活発なゼミにしたいと考えています。また、他大学との交流や関連施設の見学、ゲストスピーカーの講義も企画し、これらを通して様々な見識を身に付けて頂きたいと思います。交通分野(例えばJCT、空港、クーリーズ船、港湾、高速ツアーバスなど)に興味を持つ学生はもちろん、観光関連産業や地域活性化などの分野に関心がある学生これから勉強したいと思っている学生、誰でも歓迎です。

ゼミの活動内容

ゼミナールでは、主に交通分野を研究領域とし、フィールドワーク、基本文献の整理、調査分析など様々な作業を通して、ゼミ生1人1人が自分自身で調査研究できる力を養成することを目指して活動を行います。はじめに、2年次基礎演習では、ゼミ生の関心に応じて3~4つ程度のグループを作り、グループ研究のテーマを決め、そのテーマに沿ったフィールドワーク先を決定してもらいます。そして、フィールドワークを行うための準備として文献整理や調査先の下調べを行ってもらい、冬季休業期間中にグループでフィールドワークを行ってもらいます。3年次はフィールドワークの結果をもとに秋から冬に開催される各種ゼミナール



担当教員の研究

私が取り組む研究は、これまで一貫して農業・農村における奨励活動と、そこから派生する教育・福祉的活動、観光振興活動などに焦点を当て、各地の調査を行ってきました。以下では、近年の主な研究テーマについて紹介します。

世界／日本農業遺産登録を通じた地域農業経営

2000年代以降、世界／日本農業遺産（FAO／農林水産省）、重要な文化的景観（文化庁）など、農村景観、農村文化、農業技術を後世に残す保護制度が誕生しています。地域農業の担い手が早晚不在となるなかで、これらの制度を活用して国十全とともに農業・農村の歴史的・文化的価値を活用した地域観光を行ふこととともに、持続的な地域農業システムの再編が求められています。

一方で、現在では教育政策、農業政策の一環で展開されている学校給食における地産地消ではあります
が、その安定的な生産や供給体制化、いかに教育活用できるなど課題が残っています。学校給食の今昔の状況を踏まえながら、その推移や今後の展望を研究しています。

学校給食での食材供給は戦後整備されました。しかし、大規模調理場の建設や、大口の食材供給経路の形成により、地域で農業生産が行われていても関わらず、その利用が乏しい状況がありました。各地域の実践や政策進展により、現在は47都道府県、いざれの学校給食においても程度の違いはありますが、地場産農産物が導入されています。そして食材としてだけではなく、生産者らによる指導も含めて教育素材としても活用する状況がみられています。

現在取り組む研究では、世界／日本農業遺産等の国内認定地域を対象に、持続的な地域農業マネジメントシステムの形成要因の解明を行い、農業経営と「農業遺産」保全が両立した地域農業のあり方を提示することを目的に各地の事例調査を実施しています。多くは世界農業遺産申請時の「行動計画」において策定される農業者および自治体や関係団体等による「農業遺産保全と持続的営農のための組織化」の実態に着目し、持続的な地域農業マネジメントシステムの形成に求められる理論構築を試みています。

学校給食における 地産地消と食育

学校給食での食材供給は戦後整備されましたが、大規模調理場の建設や、大口の食材供給経路の形成により、地域で農業生産が行われてい

理想を高く持ち、実現するための学びと行動ができる大学生活にしてください！

ヤミの活動内容

本ゼミでは、農業・農村など地域資源を生かした観光振興に関する学習・研究を行っています。演習一では、単に輪読を行うのではなく、事前に各自が予習を行ったうえで、定められた課程に従つてディスカッションを行う協同学習の手法である「LTD学習法」を実施しています。この方法は、専門文献の講読を行う際に、予習をもとにしたディスカッションをしながら積極的に学び、理解度を高めるものとなっています。

3年生のグループ研究では、現地調査を実施し、他大学との交流ゼミナーや合宿を行います。研究成果は、全国エコツーリズム学生シンポジウムや群馬県庁など、学外での発表機会があります。



竹内和彥(2013年)

『世界農業遺産 —注目される日本の黒地里山』



担当教員の情報
職 位 教授
専門分野 農業経営学
農業・農村における観光・ 交流活動による地域振興
担当科目 観光資源論 地産地消・スマートカード論 エコツーリズム論 エコツーリズム・グリーン ツーリズム演習

演習IIでは、卒業論文に関する研究と論文執筆を行います。地域観光・農業・環境・食など、各自の課題意識に基づいたテーマをもとにした調査・研究を行っています。研究テーマに関しては、ゼミ生の意志に基づき選定をさせ、課題意識を醸成したうえで、文献調査のみならず、現地調査の実施による研究を重視しています。

担当教員の研究

多文化共生社会をめざして

現在、日本には二八〇万人以上の外国籍の人々が暮らしており、日常生活のなかで外国人と接することも増えてきました。少子高齢化による労働人口の減少や世界的な留学生獲得競争のもと、日本における外国人住民は今後ますます増加していくことが予想されます。

自分が生まれ育った文化から離れて、まったく違う言語が使われている国で生活することは大変な苦労が伴いますが、私たちのまわりにいる外国人は、必ずしも教室で日本語を教えてもらえるばかりではありません。経済的な理由や仕事の都合など様々な事情から日本語を学びたくても学べない人がいます。そのような人たちが、言葉ができないければ何もできないと諦めることなく、自分のやりたいことにチャレンジしながら安心して生活していくためには、わからないことがあります。でも気軽に助けを求められる環境や、悩みを聞いてくれる身近な日本人の存在が欠かせません。言語や文



担当教員の情報

職位	准教授
専門分野	日本語教育学 留学生教育
担当科目	大学生活のための日本語 専門聴解、ビジネス日本語Ⅰ 多文化共生論 異文化コミュニケーション

外国人とのコミュニケーション

私は、外国人と日本人が交わる接觸場面のコミュニケーションを分析し、そこで見られる問題や日本人の言語行動、日本語会話の特徴について研究しています。

外国人とのコミュニケーションを成功させるためには、私たちが普段どのように人とかかわっているのか振り返り、日本語を母語としない人の視点に立って客観的に日本語を捉えることが重要です。外国人にとってわかりやすい日本語とはどういうものか、外国人とのコミュニケーションを通して我々日本人も学んでいく必要があるのです。

化の違いに閑わらず、誰もが安心して暮らせる社会を築いていくためには、私たち一人一人が自分にできることを考え、外国籍の人たちを「住民」として受け入れていくための環境づくりが必要なのです。

自分にできることを考えよう！

学生と接するにあたって

私の専門は日本語教育学で、留学生対象の日本語科目のほか、「多文化共生論」や「異文化」「コミュニケーション」などの授業を担当しています。授業では、日本人学生と留学生が交流しながら学び合い、体験を通して理解することを心掛けています。また、学んだ知識を実生活でも活かせるように、実践的なトレーニングを取り入れ、学生同士が協力して課題に取り組めるように工夫しています。

例えば、「多文化共生論」の授業では、言葉がわからない外国で震災に遭つたらどのような状況に置かれるのかを、シミュレーションを通して学んでいます。言葉がわからないことから生じる不安な気持ちを体験し、留学生の経験を聞くことで、外国人が災害弱者にならないためのまちづくりについて考えていきます。

また、「異文化」「コミュニケーション」の授業では、日本人学生と留学生が協力して、外国人住民に向けた新聞記事や大学紹介ポスターを作成し、日本語弱者の立場に立った「やさしい日本語」を身に付けていきます。

皆さんには、このような活動を通して価値観の異なる多くの人と出会い、多文化社会において自分を表現することができる異文化コミュニケーション能力を身につけてほしいと考えています。そして、一人一人が自分にできることを考え、多文化共生の地域づくりに貢献できる人になつていつてくれる期待しています。

木暮律子研究室



岩田一成・柳田直美(2020)

『「やさしい日本語」で伝わる！公務員のための外国人対応』

学陽書房

多文化共生時代を迎える、外国人の人にもわかりやすい日本語の伝え方が注目されています。この本では、そんな「やさしい日本語」を使ったコミュニケーションの心構えやテクニックについて学ぶことができます。公務員を目指している人だけでなく、外国人と日本語で交流したい人にもおすすめの本です。



担当教員の研究

卒業旅行で
他文化と出会い

私が専門としている文化人類学とは、他文化と自文化を比較し、一般理論を導き出そうとする学問です。私が他文化を強く意識したのは卒業旅行の時です。成田空港からモスクワ経由でロンドンに到着し、ヨーロッパ各地をまわったあとで、アテネから陸路でイスタンブールに入りました。ヨーロッパでは教会や大聖堂を中心に観光し、とくにドイツの教会のゴシック様式の尖塔に心を動かされました。けれども、五感が一齊に刺激されるような高揚感を味わったのは、イスタンブールが初めてでした。異国情緒漂うモスクのある風景、定時に響きわたる礼拝への呼び掛け、雜踏さえ心地よいバーザール。すべてが新鮮で好奇心をかき立てるものばかり。それがイスラーム世界だったのです。

**自文化の鏡としての
他文化の研究**

縁あって、フィールドは南アジアのムスリム社会となりました。ニューデリーの大学に留学し、3年間、ムスリムの家庭に滞在しました。驚いたのは、インド人よりも私の方が、インドのことを探っているということ。当たり前ですね、私はインド研究者なのですから。それなのに、現地の人々が私に質問するのには日本のことばかり。彼らにどうて、私は日本代表なのです。回答で

「自文化と他文化が接觸する場を「コンタクトゾーン」(接觸領域)と捉えることがあります。コンタクトゾーンには、面白い問題が潜んでいます。人類学者(自己)が文化的な他者とどのように向き合い、交渉し、記述するのかとか、グローバル化が進む現代でも、自文化と他文化を分離して考えることはできるのかとか。みんなさんの身近なところに「自分の常識や感覚とは違う」ヒト・モノ・コトはありませんか? コンタクトゾーンを歩いて、問題を発見するセンスとスキルを磨きませんか?

歩いてみよう
コンタクトゾーンを

きるよう、慌てて日本のことを勉強しました。インドで調査しながら私自身も「これって日本ではどうだったかな」と考えることが増えていきました。他文化を研究することを通して自文化を見ることが、文化人類学なのです。



担当教員の情報

職位	教授
専門分野	文化人類学 南アジア地域研究 イスラーム地域研究
担当科目	文化人類学 宗教学 アジアの文化と観光 演習

問題を発見するセンスとスキルを磨く!

ゼミの活動内容

本ゼミでは、個人研究が中心です。従って、研究テーマも自由です。実際、ゼミ生の研究テーマは、観光関連だけでなく、ジェンダー、セクシユアリティ、宗教とグルメ、生死、死生など多様です。観光の定義からはみ出しているのでは、と感じられるかもしれません。コンタクトゾーンとしての観光を考察するにあたって、どれも重要な切り口です。ゼミでの学びは次の通りです。まず、2年後期の基礎演習では、テキストの輪読、スピーチやプレゼンスとスキルを磨きませんか?

最後に、4年生の演習では、未来を見据えて、異文化間交流・他者理解につながるテーマを選び、卒業論文を作成します。2年半の間に、研究テーマを変えることも、同じテーマを掘り下げていくことも可能で

小牧幸代
研究室

長沢英治(監修)・鳥山純子(編著) (2021年)

『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ4
フィールド経験からの語り』

明石書店

「手間がかかり、お金がかかり、時間がかかる割には収穫が約束されず、コストが悪い」のが、フィールドワーク。それでもフィールドワークをするのはなぜ? 本書で答えが見つかります。



第二言語習得

担当教員の研究

最近、通訳訓練の手法の一部が英語教育に応用されていますが、その中で最近注目を集めているシャドーイングの効果についても研究しています。シャドーイングというのは、人の発話を聞きながら、ほぼ同時に、文字通りシャドー（影）のように元の発話を真似していく訓練です。もともとは同時通訳訓練の導入として、聞きながら話すという非日常的な作業に慣れさせるために行われていました。オウムのように聞こえてきたものを忠実に真似して発音するという単純そうに見える行為ですが、外国语学習においては、このシャドーイングが非常に効果的であるとされています。

本人学生の冠詞使用の傾向、冠詞習得を困難にしている要因を考察し、冠詞習得を促すための指導法を模索しています。

関口智子研究室



担当教員の情報
職位 教授
専門分野 言語学(統語論)
第二言語習得
通訳翻訳教育
担当科目 General English I・II Business English I・II・III・IV World Issues I・II

Practice makes perfect! 練習を続ければ完璧になる: 習うより慣れろ!

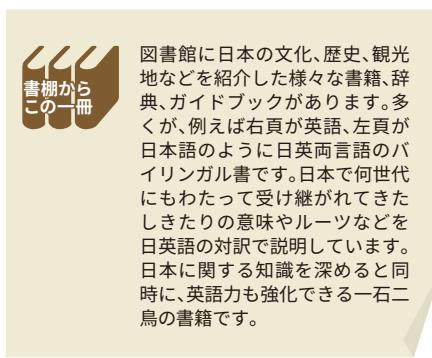
学生に接するにあたって

私は、子どもの頃から言語に関心があり、NHKで放映されていた様々な語学のテレビ講座をよく見ていました。それぞれの言語はどんな風に聞こえ、どんな文の仕組みをしているのかに大変興味がありました。そんなことから、大学では言語学を専攻しました。大学卒業後は、国際電信電話（KDD、現KDDI）に入社し、東京国際電話局に勤務していました。しかし、留学の夢を捨てきれず、思い切って退職し、カナダとアメリカに留学しました。帰国後は、非常勤講師として関東圏内の大学で英語とフランス語を教えるかたわら、商談通訳や通訳ガイドをしていました。日本では、会議通訳、商談通訳などに資格はなく、通訳案内士（いわゆる通訳ガイド）が国土交通省管轄の唯一の国家資格です。通訳ガイドは、外国



中国、広州の学会にて

意味で通訳とは少し異なります。海外から日本を訪れる観光客に、日本の歴史や文化を英語やその他の外国語で紹介します。学生の皆さんにはプロの通訳ガイドを目指さなくとも、自分の地元や、高崎、群馬、日本について簡単に紹介できる英語力やプレゼンテーションスキルをぜひ身に付けて欲しいと思います。そして、日本についてどんどん発信し、将来、海外との懸け橋になる人材が育つてくれることを期待しています。私のゼミはあります、が、英語選択科目の「World Issues」を担当します。英語の生のニユースを素材に、語彙力とリスニング力を向上させるとともに、文法と理解力を養成していきます。英語で世界情勢を理解する知識も養っていきますので興味のある人はぜひ履修して下さい。



担当教員の研究

①地域持続の条件研究

私は、長年に渡って地域振興の原理について探究してきた。1990年代に入ると、過疎地域では、更なる人口減少と高齢化によって限界化が進展し、集落の存続が問題となり、地方都市の中心市街地においても同様の問題が顕在化するようになった。こうした問題への処方箋はないのか、これが第一の研究テーマであった。この研究へのアプローチは、近世の農山村に存在した入会林野を起源として、明治以降も集落の共有財産として存在してきた共用林の機能分析によって行われ、空洞化の進む中心市街地にも応用可能な理論を得ることができた。研究成果は、西野寿章（2013）『山村における事業展開と共有林の機能』（原書房）にまとめた。

②地域の内発性に関する研究

私が学生時代の1970年代後半から地域主義、内発的発展に関する議論が活発化していた。(1)の研究に関連して、地域の内発性が発現する機会を歴史的に捉えて、研究してきた。具体的には、修士論文研究の際に知った戦前の町営電気事業、村営電気事業の成立条件の析出を通して考へてきた。研究から得られた知見は、2011年3月の東北沖巨大地震の発生に伴う原発事故後の電力改革問題に寄与できるものとなつた。研究は、西野寿章（2020）『日本地域電化史論』（日本経済評論社）にまとめた。

③グローバル化と地域経済

私は、高崎経済大学での30年間、ゼミナール生とともに、農山村地域、地方都市中心市街地の研究を積み上げてきた。ほんどの研究は、限界化の著しい過疎山村で行われたが、2020年度には、以前から気になっていた高崎市の旧城下町、中心市街地研究に着手した。ゼミ最終研究となつた2021年度の度に研究報告書をまとめることとなつて、その結果、群馬県神流町の研究成果と合わせて、私の定年の年である2022年（最後）度に研究報告書をまとめることとなつている。ゼミ生との研究から、浮かび上がってきた。



担当教員の情報

職位	教授
専門分野	経済地理学
担当科目	農村地理学 観光地理学 地域振興論 演習

大学では「問題意識」を持つことが不可欠です。

ゼミの活動内容

西野寿章研究室

西野ゼミナールは、1991年度から経済学部に、1998年度から地域政策学部にオーブンした。私は、学部ゼミを選択する時、地域研究の成果を報告書にまとめる活動をして、いた経済地理学ゼミを選択した。前期は論文、後期は研究レポートを執筆して、3月にはタイプ印刷の研究報告書を刊行した。当時は、ワープロではなく、原稿は全て手書きであった。このゼミで鍛えられたことが、研究者の道を志すきっかけとなった。本学で、ゼミを担当するようになつたとき、迷わず、この方式を踏襲した。ゼミ1期生は、見事に研究をこなして、その後のゼミ活動の手本となつた。研究報告書はすでに28冊を数え、最終的には29冊になる。今、30年余りのゼミナール活動を振り返ると、ゼミ生を教えていたつもりが、ゼミ生から多くのことを教えてきたことに気づく。感心のある人は、研究報告書を図書館に寄贈してあるので参考されたい。



1991年度
西野ゼミ1期生
(最初)



2021年度
西野ゼミ30期生
(最後)

諸富 徹(2018)
『人口減少時代の都市』
中公新書。



諸富氏は、環境経済学、財政学、地方財政論を専攻する経済学者である。本書は、今後的人口減少社会を展望しつつ、都市経営のあり方、持続可能な都市の政策原理を提示している。事例には農山村地域も取り上げられ、持続的な地方財政形成の方法としてドイツのシュタットベルケにも言及され、今後の地域のあり方を考える好著と言ってよく、地域政策学部の学生のみなさんに一読を勧めたい。

担当教員の研究

エスニックマイノリティと観光

私は大学院時代からエスニックマイノリティ(少数民族)の方々と観光の関係性に興味を持ち研究を続けています。大学時代に60年代にアメリカで起こった市民権運動に関する本を読み「人種のるっぽ」と言われるアメリカでの人種差別に興味を持ったことやエスニック雑貨が好きだったことなどからこの研究テーマに惹かれ、少数民族の方々が作る伝統工芸品がお土産になることの影響や、「ルーツ観光」として移民やその子孫たちが自分の祖国を観光者として尋ねることに関する研究を行ってきました。特にグローバリズムのなかで、少数民族の方たちの固有文化、帰属意識、民族意識がどう変わっていくのか、それに観光はどうのような役割を果たすのかに興味を持っています。

外国人街の観光地化について

2011年に本学に赴任してからは、ブラジル人街(群馬)や韓国人街(大阪)を例として、外国人街の観光地化に関する住民の意識を研究しています。地域政策の観点から観光地化をどうえ、観光地化がどのように日本人住民と外国人住民の間の相互理解・雇用促進、外国人のエンパワーメントといった地域的課題を解決することに役立つかを調べてきました。研究を通して同じ地域の中でも観光地化に関する考えは社会的立場によって大きく違

った人達の集合体であることを理解する必要があると思っています。

うことが明らかになりました。「地域住民」を考えるとき、それが一つのグループではなく様々な考え方を持つ人たちの集合体であることを理解する必要があると思っています。

コロナ禍と観光

最近は、「コロナ禍における観光」在り方にも興味を持っています。コロナ禍において観光をする人と控える人の両方がいますが、それぞれの理由や理由による長期的な旅行行動への影響の差等を調査しています。例えば、過去の研究では、禁煙からに基づいて、コロナ禍で変わった人々の観光行動の根本的な理由とその影響を探っています。



観光を「社会を映す鏡」として考えてみよう！

ゼミの活動内容



担当教員の情報

職位 教授

専門分野 観光学、地域住民と観光、エスニックマイノリティと観光

担当科目 國際観光論、観光プロモーション論、観光文化政策論、演習

有川浩(2011)

『県庁おもてなし課』

角川文庫

専門書ではなく映画化もされた小説ですが、地域に観光客を呼ぶプロセスやそれにかかる公務員、民間業者、地域内外の人達の考え方などがとても分りやすく書かれています。専門書に入る前に読んでみるにとてもいい本だと思います。



丸山ゼミでは、観光と文化、そしてそれにまつわる観光政策について学びます。ある地域の文化を観光化するとき、どういうプロセスを経ていくのか、そのプロセスと政策はどのようにかかわっているのか、観光化は地元住民や文化へどのような影響を与えるのか、そしてどのように観光化したいかを決める権利をもつのは誰なのか、誰が利益を得るのかといったことを考えていく必要があります。また、観光が与える影響というものは、地元社会だけに限りません。文化観光は、どのように観光者にどのような影響を与えるのでしょうか。本ゼミでは、「観光」という人が楽しむために行う行動が域に与える影響を分析することによって、地域づくりのなかで観光をどのように生かしていくかを考えます。またディスカッション、プレゼンテーション、グループ研究などそれぞれが課題に主体的に取り組むことを目標としています。

担当教員の研究

2つの「シュウカツ」

人生の中で重要な行動は、人によってさまざまかもしれません。保護者から経済的に自立するために行う「就活（就職活動）」は、人生の前半で重要な行動のひとつであると思います。また、2010年代から広がり始めた、自分らしい人生の終わり方を考え、実践する活動、いわゆる「終活」は、人生の後半での大切な行動のひとつになりつつあります。

しかし、だれもが満足できる2つの「シュウカツ」を行えるわけではありません。不登校やひきこもりになった若者は、そもそも普通の就活ができません。そこで、行政や民間非営利団体（NPO法人など）が社会復帰と就職の支援を行うことがあります。また、身寄りがなく生活に困窮している人は、終活を十分に行うことができません。このような場合、葬式やお墓についての本人の希望がだれにも伝わらず、故人の遺志が無視されます。一部の地方自治体では、民間団体と協力しながら、この問題に取り組み始めています。この2つ「シュウカツ」で民間団体と行政に何ができるのか、どんな協力関係が望ましいか、といったことを研究しています。

**人とのつながりを大切にした
経済活動は成り立つ？**

もうひとつのお題は、より大きなものです。現在、わたしたち



はグローバルな市場経済の中で生きています。厳しい競争を勝ち抜いた生き方が求められています。とはいっても、他人を尊重しつながりを保った経済活動を行うことは本当に不可能なのか。疑問が浮かびます。答えは簡単にはできません。ただ、21世紀に入ってから、社会貢献活動とビジネスの両立を強調する「社会的企業」という組織が登場しました。簡単に言えば、上述の民間非営利団体、あるいは協同組合といった既存の団体が、リニューアルしたものです。彼らによる経済活動や運動の総称を「社会的連帯経済」と呼んだりもします。この経済のかたちにどんな可能性があるのか、また限界はどこにあるのか。そのような点に 관심を寄せて研究をしています。

目的を持って学生生活を過ごしてください。

八木橋慶一
研究室

ゼミの活動内容

ゼミでは、まず社会的企業（国内ではソーシャルビジネスの事業者とも言います）の基礎知識を習得するため、テキストを輪読します。同時に、これらに該当する団体（たとえばNPO法人）も実際に訪問して調査を行います。2・3年次はこのような地道な作業を通じて卒業論文のテーマを決め、4年次には論文作成に取り組むことになります。普段のゼミでは、各自あるいはグループで報告を行います。しかし、勉強だけでは息が詰まりますから、夏合宿やコンバもあります。そのほか、高崎市にある榛名神社の社家町地区で地域活性化のボランティア活動も行っています。お土産物の開発、神社のボランティアガイドなど、地元の方と協力しながら活動しています。

楽しく、でも適度に厳しく勉強するのがこのゼミのモットーです。2年半のゼミはあつという間です。充実したものになるよう主体的に動いてください。



担当教員の情報

職位 教授

専門分野 社会的企業論、ローカル・ガバナンス論

担当科目 社会起業論、NPO論

コミュニティビジネス論

演習

カール・ポラニー（1944-2009）（野口建彦・柄原学訳）

『[新訳]大転換—市場社会の形成と崩壊—』

東洋経済新報社

わたしたちが当たり前と思っている市場経済について、その成り立ちや社会に与えた影響、問題点を古典から学んでみてください。



担当教員の研究

観光史から、地域社会の
人々の「思い」を考える

観光地や観光活動のなかで展開される文化や伝統は、一見すると過去から形をえすに綿々と受け継がれてきたものとして、本質的に捉えがちです。そして、観光の現場でも同様に、文化や伝統の持つ歴史的古さや普遍性といった「ルーツ(起源)」を強調し、地域の独自性や固有性を美德として語っていきます。しかし、観光史を調べていくと、一連の文化や伝統が実は、観光という舞台のなかで選び取られたひとつの「台本」でしかないことに気づくはずです。むしろ、文化や伝統をめぐるゲスト(観光者)、ホスト(観光地)、プロデューサー(観光産業)の間での相互交渉によって蓄積されてきた「ルート(歴史)」と、その後に存在する、人びとや社会の多くの「思い」が存在することを知ることになります。

私自身、中東・イスラーム社会や日本国内の宗教観光を分析するなかで、紆余曲折しながら発展してきた現象の背後にある、人びとの多様な思いに触れきました。中東から始まり、南アジアや東南アジア、西洋諸国や日本各地の聖地をめぐるなかで、観光に仮託される人びとの思いや歴史の重さを、常に感じています。



担当教員の情報	
職位	准教授
専門分野	中東地域研究 観光史 観光人類学
担当科目	演習

人生哲学としての
ツーリズム・リテラシー

研究を進めていくと、観光とは決して「一時的な非日常」ではなく、私たちの日常生活や人生とコインの表裏のように、密接に関わりを持つ実践であることに気づかれます。そのなかでも、口頭や文字、写真で「観光経験を語る」という行為が、時代や地域固有の社会的文脈を生み出す実践であることを「よりよい観光を実践するための技法や思考」としての「ツーリズム・リテラシー」の概念を絡ませながら明らかにします。

観光を実践するための技法や思考としての「ツーリズム・リテラシー」の概念を絡ませながら、その歴史的変遷を追っています。特に、19世紀から20世紀にかけて中東諸国を旅した旅行者たちの旅行記を分析しながら、その歴史的変遷を通じていまの「ツーリズム・リテラシー」を蓄積する足掛かりとなるはずです。そして、研究の過程で出会い、交流する土地やヒトの経験の数々が、皆さん自身のツーリズム・リテラシーを蓄積する足掛かりとなるはずです。この一連の観光史研究の経験の数々が、皆さん自身のツーリズム・リテラシーを蓄積する足掛けとなります。この一連の観光史研究の経験の数々が、実は観光史研究における最大の魅力であることに、気付くのではないでしょうか。

世の中には常にわからないことだらけです。

ゼミの活動内容



ジョン・アーリ&ヨーナス・ラースン
(2014)『観光のまなざし 増補改訂版』
加太宏邦訳、法政大学出版局

観光に関するさまざまな議論やアイディアが詰まっている一冊で、大学院時代から何度も何度も読み返しています。読み返す都度に、今まで考えもしなかった新しい発見があったりします。おそらく今後も、時を経て何度も読み返すことになるのでしょうか。



